

第14回多摩川流域歴史セミナー 開催報告
多摩川にまつわる農耕と祭礼の歴史



第 14 回多摩川流域歴史セミナー 開催報告（詳細版）

目 次

1. 開催概要	1
2. 午前の部：現地散策	2
2.1 開会	2
2.2 現地散策	2
3. 午後の部：セミナー	7
3.1 開会挨拶	7
3.2 基調講演「府中に残るサイノカミ・どんど焼き行事について」	7
3.3 意見交換	12
3.4 閉会挨拶	16



1. 開催概要

テーマ：多摩川にまつわる農耕と祭礼の歴史

日 程：2026年5月30日（土）10:00～16:00

午前の部：10:00～12:00

午後の部：13:00～16:00

形 式：午前の部：現地散策（西府湧水、府中用水、分梅町水田、分倍河原古戦場碑、新田川緑道、雑田堀親水公園）

午後の部：セミナー

（府中市郷土の森博物館／オンライン開催（ZOOM））

主 催：多摩川流域懇談会

講演者：佐藤 智敬氏（府中市郷土の森博物館 学芸係長）

コーディネーター：神谷 博氏（多摩川流域懇談会歴史部会 部会長）

コメンテーター：小野 一之氏（府中市郷土の森博物館 前館長）

参加者：午前の部：15名、午後の部：48名（会場参加8名、Web参加40名）

【現地散策のルートマップ】





2. 午前の部：現地散策

2.1 開会

多摩川流域懇談会運営委員会の神谷氏より開会の挨拶があり、現地見学が開始されました。

また、府中市郷土の森博物館・学芸係長の佐藤氏より、現地散策ルートについて説明がありました。



開会の様子

2.2 現地散策

2.2.1 府中市指定文化財（史跡） 御嶽塚

＜主な内容＞

- ・ 御嶽塚は、古墳時代に築造された古墳である。
- ・ 西府文化センター周辺では、御嶽塚のほかにも、古墳時代後期の 6～7 世紀はじめ頃に築かれた 13 基の古墳が確認されている。



御嶽塚周辺の様子



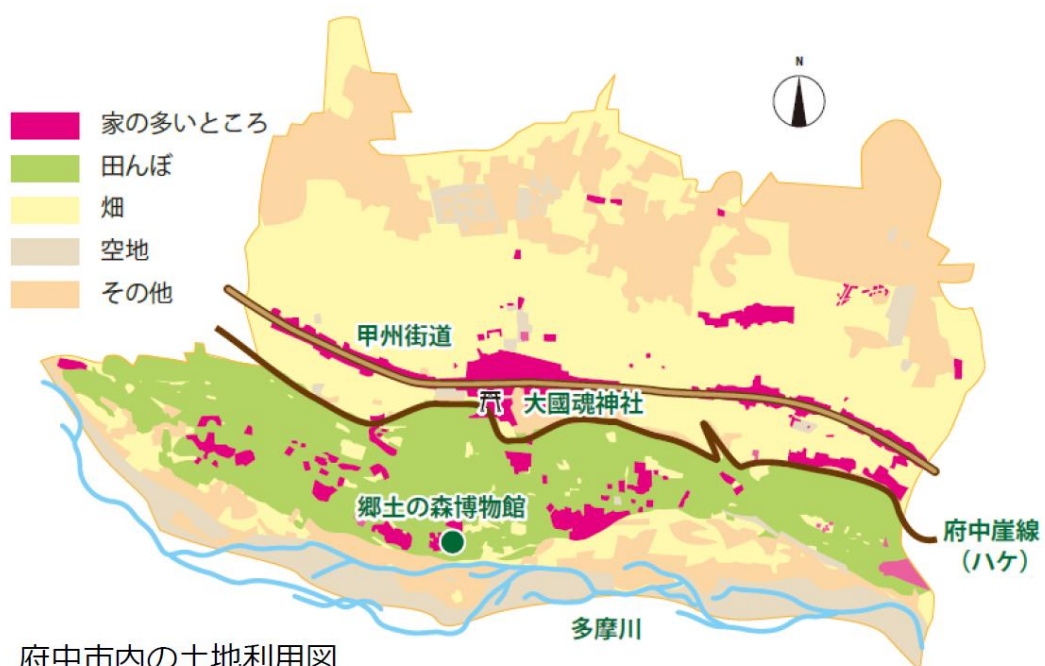
2.2.2 府中市内の崖（ハケ）

<主な内容>

- ・ 東京都府中市には、多摩川の流れによって削られてできた崖（府中崖線）が東西に延びている。
- ・ 崖は府中周辺では「崖（ハケ）」と呼び、その北部を崖上（うえ）、南部を崖下（した）と呼んでいる。
- ・ 崖上はその立地から水害のリスクが小さい代わりに、大きな川が流れておらず、水を得るのが難しかった。そのため、崖沿いに集落が形成され、それより北部には雑木林や畑が広がっていた。
- ・ 崖下は多摩川に削られた低地であるため水が比較的得やすく、多摩川から引かれた用水路網が張り巡らされており、かつては水田地帯だった。



散策の様子





2.2.3 西府湧水

<主な内容>

- ・ 府中崖線西府町緑地の崖下には、「西府湧水」と呼ばれる湧水がある。
- ・ 府中崖線沿いには多くの湧水がある。それらは府中用水に集まり、府中を潤している。

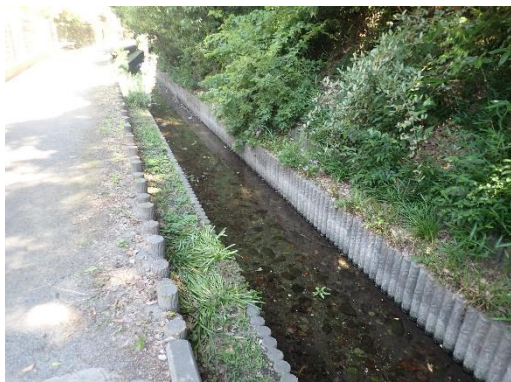


西府湧水

2.2.4 府中市内の用水路

<主な内容>

- ・ 府中市内には、府中用水、西府用水、多磨用水が運用されている。
- ・ 府中用水は、国立市青柳の多摩川から取水し、府中市郷土の森博物館付近で排水されている代表的な用水路である。
- ・ 府中用水は、5月中旬頃に通水を行う。
- ・ 府中用水沿いでは宅地化がすすんでおり、上流に行くほど水田が残る地域となっている。
- ・ 近年の用水路は、治水安全度を向上させるため、水路自体を暗渠化している区間も多い一方で、一部区間は緑道として整備し自然との共生にも寄与している。



府中用水



2.2.5 近世～近代の水田利用

<主な内容>

- ・ 麦の収穫後に水田耕作（6～7 月に田植え、10 月頃に稲刈り）を行う二毛作を続けてきていたが、1950 年代後半に麦づくりは下火になっていき、現在はほとんどつくられていない。しかし大きく生産暦は変更されず、6 月に田植え、10 月に稲刈りが基本となっている。



水田



用水路

2.2.6 分倍河原古戦場碑・新田川（しんでんがわ）緑道

<主な内容>

- ・ 鎌倉時代末の 1333 年、幕府と新田義貞の軍勢で争われ、鎌倉幕府滅亡のきっかけの一つとなったとされる分倍河原の合戦が府中市域の水田地帯であったことを示す石碑がある。
- ・ JR 分倍河原駅には新田義貞の像が立っている。
- ・ 石碑は新田川緑道沿いにあり、近くには農業用水（新田川）が流れている。



分倍河原古戦場碑の見学の様子



新田川



2.2.7 雑田堀親水公園

＜主な内容＞

- ・ 雑田堀親水公園は、新田川と雑田堀の水を使用しており、近接する工場による用地提供と地元の方の協力によって整備された。
- ・ 雑田堀親水公園の水の多くは、府中市郷土の森博物館付近で多摩川に排水される。



雑田堀親水公園

3. 午後の部：セミナー

3.1 開会挨拶

多摩川流域懇談会歴史部会部会長の神谷氏より、開会の挨拶およびセミナー主催の「多摩川流域懇談会」についての説明があり、午後の部が開会されました。



神谷氏

<主な内容>

- ・ 多摩川流域懇談会は、市民・行政・企業・学識経験者等が参加する「ゆるやかな合意形成の場」として、多摩川に関わる課題を議論している。
- ・ その中に歴史部会が設けられており、多摩川の歴史に関する新たな知見を共有・記録するため、歴史セミナーを継続して開催している。
- ・ 本セミナーは『新多摩川誌』を補完する取り組みの一環であり、今回は府中を対象に、伝承や民俗をテーマとして開催した。

3.2 基調講演「府中に残るサイノカミ・どんど焼き行事について」

府中市郷土の森博物館・学芸係長の佐藤氏より、府中に残るサイノカミ・どんど焼き行事の歴史的な背景や変遷、周辺地域との違い等について講演いただきました。



佐藤氏

3.2.1 サイノカミ行事とは

- ・ 府中市内でのサイノカミ・どんど焼き行事は、行事に必要な藁・竹を多摩川沿いの水田地帯から入手していたことと深く結びついている。
- ・ 水田が少なくなっていく現状の中で、どのように伝承が持続・変化しているのかを本日の話題の中心とする。

(1) 小正月とは

- ・ 小正月は1月15日を中心とする行事期間で、大正月に対して呼ばれ、来訪神や鳥追い・モグラ送りなどの行事が各地に伝わっている。
- ・ また、繭玉だんご、粟穂稗穂、小豆粥、綱引きなど、農作物の豊作を願う予祝儀礼も行われた。
- ・ 府中では天保11年(1840年)頃の記録『有原堂年中行事』に、粟穂稗穂や繭玉、小豆粥、粥杖など、農耕の始まりや豊作祈願に関わる小正月行事が記されている。



郷土の森博物館で飾る繭玉

(2) 道祖神とは

- ・サイノカミ（塞の神・歳の神）、サエノカミ、ドウロクジン（道陸神・道六神）などと呼ばれる。平安期の『今昔物語集』では「道祖」を「サエノカミ」と読ませていたが、読みが伝承されず「ドウソジン」とも呼ばれるようになった。
- ・形状は石碑・丸石・自然石・神像（双体の夫婦像など）と様々であり、石の道祖神は東日本に多く残る。
- ・府中では五輪塔・宝篋印塔の一部や丸石（ゴロ石）を御神体（サイノカミの御神体）とする場合が多い。
- ・火祭りと合体している例が東日本の一部地域（山梨～多摩川周辺～横浜～大磯付近）に多く見られる。燃え切らない石が御神体に使われることが多い。

(3) どんど焼きとは

- ・小正月を中心に正月飾り・門松などを焼く行事。日本各地に広まり、「トンド」「ドンドンヤキ」「オンベヤキ」「サイトヤキ」「サギチョウ（左義長）」などとも呼ばれる。
- ・焼いた灰が魔除け・病除けになるとされ、書き初めを燃やすと字が上達するとの言い伝えもある。
- ・宮廷・貴族の儀礼「左義長」（『徒然草』に記録）が起源の一つとされる。
- ・江戸時代には正月の慣例として盛んに行われたが、火災の原因ともなったため 10 回以上の禁止令が出された。都心部での大規模な行事は今ではほとんどなくなっている。

3.2.2 府中のサイノカミ行事とは

- ・行事に必要な藁・竹が入手できる場所で伝承されてきた。府中では一か所を除き、かつて多摩川沿いの水田地帯だった場所で行われてきた。
- ・昭和 30 年代以前は中学生がリーダーとなり子どもたちが主体となっていた。冬の水田（水のない水田）が会場だった。



車返のどんど焼きの骨組
(2006 年撮影)



車返のサイノカミの様子
(2012 年撮影)

3.2.4 押立のサイノカミ行事（どんど焼き）

- ・ 昭和 54 年（1979）より押立地域センター（現・押立文化センター）のイベントとして復活した。当初「塞の神」と称していたが、現在は「どんど焼き」と呼称している。
- ・ 御神体は、ドウロクジンと呼ばれる丸石 1 つである。行事の際にある場所から取り出して据え、点火後に熱々になった御神体を引き出してお神酒をかける。
- ・ 竹 36 本・直径 8.8m 超・高さ 4 階建てマンション以上の市内最大規模の円錐形の小屋を製作する。朝 8 時から作業開始し、ボランティアの中学生も参加している。
- ・ 平成 20 年（2008）より多摩川河川敷（稲城大橋のたもと）で実施している。国土交通省に毎年許可を得ている。
- ・ 成人の日の 3 連休に内部を一般公開しており、おしるこの集い等も行っている。点火後 5 分程度で崩れる。燃えかすを持ち帰ると泥棒除けになるとの言い伝えがある。
- ・ 2021 年はコロナ禍により実施を中止したものの、2022・2023 年は制限を設けながら実施した。



押立のサイノカミ行事（どんど焼き）
(2024 年撮影)

3.2.5 四谷のどんど焼き

- ・ 平成（1990 年頃）に文化センターの行事として「創造」された。かつてこの地でもサイノカミ行事が行われていたが技術的な伝承が途絶えており、押立文化センターの方法を参考に作り始めたため、御神体を使用しない。

- ・ 2006 年より会場の田が宅地化でなくなったため、四谷文化センター内に小規模なものを製作するようになった。
- ・ 四谷では、正月飾りやお札、だるま等を飾らない。外側から松明で点火する方式であるので、「火祭り」としての側面が強い。
- ・ 四谷地区は水田が多く残っており、藁の入手は比較的容易である。参加者に団子を配布して焼く行事は継続している。



四谷のどんど焼き（2006 年撮影）

3.2.6 人見（若松町）のサイノカミ行事

- ・ 府中の北部では珍しく古くから集落を形成した場所で、麦作・湧水があった。水田地帯ではないが、藁の調達ができた地区である。
- ・ 御神体は、30 数個の丸石である。稲荷神社参道の「塞の神」石塔付近に埋めておき、行事の際に掘り出して正月飾りの周りに並べ、火やお神酒をささげる。行事後は再び埋める。
- ・ 昭和 49 年頃に中断したが、平成 18 年（2006 年）頃より復活して継続している。

3.2.7 まとめ

- ・ 府中のサイノカミ行事は、近世以前に起源を持つ小正月行事であり、道祖神（サイノカミ）の祭祀と正月飾りを焼く火祭りが合体したものである。
- ・ 近代化の中で一度中断し、昭和 50 年代以降に文化センター等の行事として復活・変遷を経ながら現在に至っている。名称も「サイノカミ」から「どんど焼き」へ変化した。
- ・ 御神体をまつる地域では、それを通常は埋める等して隠しておき、行事の際に登場させて火・お神酒等を供えるという形が現在でも受け継がれている。
- ・ 今後の課題として、行事のための用地の確保（農地の減少・宅地化）、藁・竹の調達、担い手の高齢化と技術継承、周辺住民との関係等が挙げられる。
- ・ 府中の対岸（日野市・多摩市・稲城市等）でも類似の行事が行われており、多摩川両岸の文化的なつながりが見られる。

3.3 意見交換

○神谷氏【コメント】

- ・ 午前中の現地散策で見た西府湧水は、もともと水量が少ない場所であり、渇水の影響が懸念されたが、当日は想定よりも多くの湧水が確認された。
- ・ 大國魂神社の成立には府中崖線の湧水が深く関わっており、水の存在が農業や居住の基盤となっていたことがうかがえる。



意見交換会の様子

○佐藤氏【コメント】

- ・ 府中は多摩川の地形により、崖下（水田）と崖上（畑作）という構造になっている。
- ・ かつては崖沿いに多くの湧水があり、白糸台などではワサビ栽培やホタルの生息も確認されていた。しかし、戦後の工事等により水脈が変化し、多くの湧水が枯渇したとされる。また、大國魂神社境内はかつて杉林だったとされるが、現在では多くが枯死している。
- ・ 大國魂神社のくらやみ祭では、神職が品川の海で海水を汲み、みそぎを行う習わしがある。一方、留守を預かる神職は、海水到着後に瀧神社の湧水でみそぎを行っており、現在も湧水が残っていることがうかがえる。

○神谷氏【コメント】

- ・ かつて国分寺崖線の湧水を探す際には、遠方から杉の群立ちや雪解けの早い場所を手がかりにしていた。杉は地下水の流れがある場所を好むとされ、大國魂神社周辺の杉が一斉に枯れたことは、地下水環境の変化を示す重要な事象と考えられる。
- ・ 瀧神社の湧水は重要な水源であり、枯渇しないよう保全していく必要がある。

(1) 参加者【質問】

畑・田んぼを守るために何ができるのか具体的に知りたかったです。我々が行動できること。

○佐藤氏【回答】

- ・ 用水路の口開け後は、ごみの流入により水利用に支障が出ることもあるため、ごみを捨てないことが基本である。
- ・ 田畑、用水路は地域で手入れされている自然であることを認識し、農家と周辺住民が互いの暮らしを理解することが重要である。
- ・ 相互理解を深めるため、農家と周辺住民が意見交換できる場を設けることが、今後の改善につながると考えられる。

(2) 小野氏【質問】

- ・ 流域の民俗文化は、単純な上流・中流・下流の区分では捉えきれず、地域ごとの共通性やパターンが考えられている。どんど焼きについても、多摩川が境界となっているのか、あるいは流域文化をつなぐ軸となっているのか。日野市や多摩市など周辺地域との比較を通じて、府中のどんど焼きの特徴を聞きたい。

- ・ どんど焼きは中断と復活を繰り返しており、地域コミュニティ再生のよりどころとして機能してきた面がある。行事には、舞台性や食を伴うイベント性がある一方で、実施に伴う負担や地域内の疎外も考えられる。こうした点を踏まえ、どんど焼きが今後、コミュニティ再生の拠点となり得るかについて意見を伺いたい。

○佐藤氏【回答】

- ・ どんど焼きに類似する行事は多摩川流域に限らず広域に見られ、明確な分布範囲を定めることは難しい。押立の事例のように、道祖神由来や正月飾りを燃やす要素で捉えると、関東南部から静岡周辺にも類似例がある。
- ・ 押立のどんど焼きは、文化センター圏域のコミュニティ協議会を中心に継承されてきたが、担い手の高齢化や若年層への技術継承が課題となっている。
- ・ 一方で、地域外ボランティアや女性参加など、新たな担い手づくりに向けた変化も見られる。

(3) 参加者【質問】

サイノカミは子どもの行事だったことに驚きました。江戸時代にも子どもの行事だったのでしょうか。御神体が幾つもあることも不思議に感じました。どうやって御神体を決めたのでしょうか。

(4) 参加者【質問】

四谷で創造された話がありました。文化センターの人がきっかけで新たにつくられたのか、どのような経緯があったのでしょうか。

○佐藤氏【回答】

- ・ サイノカミが江戸時代から子どもの行事だったのか指し示す記録はない。
- ・ 村境の争論など大人の関与を示す記録はあり、担い手が大人から子どもへ、さらに現代では大人主導へと変化した可能性がある。
- ・ 府中の屋敷神では、稲荷などの御神体として、サイノカミの石に似た丸みのある自然石が用いられる例が多い。ただ、その石をどこから持ってきたのかは不明である。これらは加工されたものではなく、身近な河原などの自然石を選んで祀ったものと考えられる。
- ・ これらは特定の加工品ではなく、身近な石を偶然選び祀ったもので、神社本殿の御神体とは異なる性格を持つと考えられる。

○神谷氏【コメント】

- ・ 多摩川は「玉川」とも捉えられ、玉石や丸石信仰との関わりが考えられる。
- ・ 多摩川に身近に存在する玉石が、御神体として信仰される背景についてどう思われるか。

○小野氏【回答】

- ・ 多摩川は本来「玉川」とされ、玉石が多いことに由来すると考えられる。
- ・ 『万葉集』にも、丸く美しい石を「玉」に見立てる表現が見られる。
- ・ 多摩川の石を特別な場面で「玉」として尊ぶことで、御神体になっていったと考えられる。

○神谷氏【コメント】

- ・ 小菅村の白糸の滝には、滝つぼの水流で自然に球形となった「竜の手まり石」があり、信仰の対象となっていた。
- ・ 多摩川の玉石も流域のどこにでも同じ形であるわけではなく、府中付近に特に美しい玉石が見られることが関係している可能性も考えられるだろうか。

○佐藤氏【コメント】

- ・ 御神体には、割れていない丸みのある自然石のほか、五輪塔や宝篋印塔の一部など、信仰対象となり得る形のものが選ばれた例もある。偶然性はあるつつも、丸い石や宝珠に近い形など、神聖さを感じさせるものが選ばれていた可能性がある。

(5) 参加者【質問】

サイノカミ・どんど焼きの語源を教えてください。

○佐藤氏【回答】

- ・ 道祖神のことをサイノカミと呼ぶ理由は不明である。平安時代から「道祖神」に「サイノカミ」とルビが振られていたことから、その呼称が各地でさまざまな形で伝承されていったと考えられる。
- ・ どんど焼きについても語源は不明である。

(6) 参加者【意見】

御神体、うちに炉を切る（御神体や内側に炉を設置する）というのは知りませんでした。多分、多摩市内のどんど焼きではやっていないと思います。

○佐藤氏【コメント】

- ・ 多摩市や日野市などでも、どんど焼きに類似する行事は残っているが、担い手不足や都市化の影響により、規模を縮小して継続している例が多い。
- ・ 地域によっては名称や形態が異なり、日野市では新規開拓した行事であるのに宮廷儀礼を意味する「左義長」を名称として継承されている例もある。

(7) 参加者【質問】

藁が必要になると思いますが、水田の減少や多摩川河川敷でも草地が減っていると思う。今後継続するための対策や、今後必要なことは何か考えられるか。

(8) 参加者【質問】

竹の組み方（竹を組む技術）の伝承も必要かと思う。毎年1月に実施される本番のみで伝承されているのか。ほかにも伝承の場はあるのか。

○佐藤氏【回答】

- ・ どんど焼きは、世代交代や継続の可否が問われる過渡期にあり、竹の組み方や縄の結び方などの技術継承が課題となっている。
- ・ 車返では青年会を中心に技術が伝承されていた一方、押立では重機操作など特定の担い手に依存している面がある。

- ・ 藁の確保や河川敷利用の手続きも含め、行事を継続するには担い手の熱意と次世代への継承が重要である。

○小野氏【コメント】

- ・ どんど焼きは多摩川流域に限定されないが、多摩川両岸で互いに影響し合いながら継承されてきた行事として捉えることもできる。
- ・ 盆踊りと同様に、舞台装置を伴う地域行事として、近現代のコミュニティ再生との関係から比較する視点も重要である。

○神谷氏【コメント】

- ・ 子どもたちが小屋づくりや企画・手続きを担う行事には、どんど焼きと共通する学びや技術継承の要素が見られる。
- ・ 地域の大人が支えながら子どもが主体的に関わる仕組みは、今後の行事継承やコミュニティ再生を考える上で参考になる。

○佐藤氏【コメント】

- ・ 子どもに関わる伝統行事は、復活しても大人の主導や安全面への考え方に左右され、継続が難しい面がある。
- ・ 行事を次世代につなぐには、子どもの参加を一時的な体験にとどめず、大人が長期的に見守り、担い手へつなげる仕組みが必要である。

(9) 参加者【質問】

多摩川の玉石を御神体と信仰するというのは、流域の人々の多摩川の氾濫を鎮める思いもあったのでしょうか。

○佐藤氏【回答】

- ・ 府中では多摩川の水害を受けて神社が移転した例もあり、水害が長期的な脅威であったことは確かである。
- ・ ただし、御神体は特定の願いを込めたものというより、道祖神のように地域や家を守る守り神として捉えられていた可能性が高い。

○小野氏【回答】

- ・ 丸い石には、姿のよい山を神が宿る山と見立てるのと同様に、神聖な力や畏敬の念が託されたと考えられる。
- ・ その丸い石を守り神として祀ることから、道祖神祭りのような信仰が始まったのではないかと考えられる。

(10) 参加者【質問】

火というものに対する畏敬の念が、今までおっしゃっていた御神体というものと結びついてきたのは偶然なのか、それとも何か昔の人が意図したものがあって結びついたのか、そこが私としては分からないので、コメントいただきたい。

○佐藤氏【回答】

- ・ 火を超自然的な存在にささげる行為は、原初的な信仰形態の一つであり、どんど焼きや山の神行事など、全国各地で構造物を燃やして祈る行事が見られる。
- ・ 御神体の有無にかかわらず、「燃やす」こと自体が祈りやささげ物として重要な意味を持っていたと考えられる。
- ・ とはいえ、現在における府中のサイノカミ行事では、御神体を火に入れる、火を見せる、御神体を伴わないなど形態はさまざまであり、火を用いる意味や御利益も一様には定まっていない点が特徴である。

○小野氏【回答】

- ・ 火そのものを神と見るというより、火は神聖な力の表れや浄化の働きをもつものとして畏敬されてきたと考えられる。
- ・ その火への畏敬と御神体への祈りが結びついている点で、サイノカミ・どんど焼きは古い神祭りの性格を持つ行事といえる。

3.4 閉会挨拶

京浜河川事務所の大野氏より閉会の挨拶をいただき、第14回多摩川流域歴史セミナーを閉会としました。

<主な内容>

本日は早朝から、また暑い中、本セミナーにご参加いただきありがとうございました。午前中は佐藤氏の案内により崖や湧水を巡り、午後は講演および意見交換を行いました。本セミナーが、皆様の今後の活動の一助となれば幸いです。



大野氏

以上